● 星座漫筆 ●

絹屋ぼし

(野尻抱影)

星が結んでくれた未見の友人のひとりに廣島工業に教鞭を取つて居られる磯貝勇氏がある．去年僕が「新青年」で發表した北極星の周極運動に關する日本稀有の傳說も氏から惠まれたもので，其後も同地方の星辰傳說を熱心に漁つて居られる．最近には廣島の大部分から岡山，愛媛にも及んでゐるものとして絹星(宮崎)——之れにはには絹屋星．絹屋の絹星の名も傳はつてゐる金星——の說話を落手した．

それは，『天に昇るけな絹屋の娘，星になります絹星に』といふ歌で，いつの時代からか歌はれてゐる．歌の調子からは遠くも江戸から溯るまいが，昔，絹屋の娘が臨終の折に，「わたしが死んだら，天に昇つて星になります．その星は絹を透かして見て下さい．九つに見えますから」と言つて死んだ．それから後，この星だけは絹を透かして見ると，九つに見える．金星がそれだと言ふのである．

勿論これは，磯貝氏も附記されて來た通り，金星に限つたことでなく．光度の大きな星なら，もみの切れなどで透かして見れば，光線廻折の理により⁝⁝のやうに見える理窟である．これを金星としたのは，宵の明星のボビュラリティと位置，それに光の印象も傳說に最も恰好である爲めだと想はれる．だが，其他では或る特殊の宵に絹を通して此の星を見て，その對で恐らく後萩を卜した支那の年中行事の一つが，日本へまぎれ込んで來て絹屋の娘に結びついたのではあるまいかなどゝ臆測される．友人中野江漢君もそんな傳說があつた樣な記憶があると言つて調べてくれる事になつてゐるが，まだ見つからないらしい．僕は併せて，廿三夜の彌陀三尊來迎の信仰や十五夜の明月に，一例へば「後水尾院當時年中行事」にある，茄子に『萩のはしにて穴をあけ，穴のうちを三遍はしをとほされ……淸凉殿のひさしにかまへたる御座にて月を御覽あり，彼の茄子の穴より御覽じて御願あり』などゝある行事をも關聯させて考へずにはゐられない．勝手の水口に群れてゐる餓鬼を見るのも似寄りの方法があつたやうに思ふ．話は違ふが千葉地方には，坊主の執念が雨上りの晚に出る眞赤な星になつたといふ傳說があつたと言ふ．僕は蝎座のαを考へるが，これは想像に留まつてゐる．